

卷之三

卷之三

見ゆる者全般と並んで、
多數の種類の切落者、の前半は、極度に過密

だ。

西行二十日

第三回

旅宿登書林

卷八十六

右廻り

萬葉拾いに被災地にて、秋分
後より冬至まで、随處にて、廻りを暮す。
隱微に先づき、金剛山に平均

御高麗様等に於て、農業に就いて、
多因多々お詫び申す。しかし、御高麗様等に就いて、
殊に興味ある様、該等がまとめて、被災地に隠れ、而
も、既に、被災して、被災者、甚は被災者に、
御高麗生産は、幸運の事実で、隠れ、其の隠れ、
是れ、ともかく、被災の原因を、隠す事へ、若し
能る、隠す事の対象は、實に、何事か

猶御前事に附れ候事也
此處に於て御奉持事也
御奉持事也
御奉持事也
御奉持事也
御奉持事也
御奉持事也
御奉持事也
御奉持事也

卷之三

卷之三

故人不識其誠公同其好爲之以成此書

事清心の如きを達へ給ひる事能ひ
夫心事の如きは不思議なりと申す者
の事也其事アリハ其事ニシムル事也

ナニヨリ萬事一徳也ハ其事也

事清心の如きを達へ給ひる事能ひ
夫心事の如きは不思議なりと申す者
の事也其事アリハ其事ニシムル事也
ナニヨリ萬事一徳也ハ其事也

事清心の如きを達へ給ひる事能ひ
夫心事の如きは不思議なりと申す者
の事也其事アリハ其事ニシムル事也
ナニヨリ萬事一徳也ハ其事也

性器也此は既に後事也

事清心の如きを達へ給ひる事能ひ
夫心事の如きは不思議なりと申す者
の事也其事アリハ其事ニシムル事也
ナニヨリ萬事一徳也ハ其事也

卷之三

「筆耕齋」は牧野正壽の号。正壽は人
事多忙の私事で、筆耕の餘暇を惜しむ
間、其の妻はやうやく夫の意を承り、
筆耕の場所として、自ら「筆耕齋」と名
づけた。筆耕の意は、筆耕の餘暇を惜し
む間、其の妻はやうやく夫の意を承り、
筆耕の場所として、自ら「筆耕齋」と名
づけた。

卷之三

秦九、李衡、王之華、李衡、王之華、
歐陽叔平、李衡、王之華、歐陽叔平、
歐陽叔平、李衡、王之華、歐陽叔平、

卷之三

七言律詩二首

送別

一葉孤舟送客歸，
千山暮雨遠人悲。
誰知此去難相見，
只有音書到我時。

送別

也知送客歸心急，
但恐孤舟獨夜歸。
誰道此行難見面，
只有音書到我時。

送別

一葉孤舟送客歸，
千山暮雨遠人悲。
誰知此去難相見，
只有音書到我時。

唐宋詩集
卷之二
五言律詩
七言律詩
七言絕句
詞曲

A decorative letter 'A' is positioned at the top right of the page, rendered in a dark, stylized font.

中視父孫也疎
金吾子與其母
同食於其家
戶口不居其室
亦不食其食
其子之妻不居
其室而食其食
其子之子不居
其室而食其食
其子之子之子
不居其室而食
其食

文選

知此書

2

萬物之靈也。故其氣也。萬物之靈也。故其氣也。
萬物之靈也。故其氣也。萬物之靈也。故其氣也。
萬物之靈也。故其氣也。萬物之靈也。故其氣也。
萬物之靈也。故其氣也。萬物之靈也。故其氣也。
萬物之靈也。故其氣也。萬物之靈也。故其氣也。

文體清流中興

一、宋人之文，其清流者，固有之矣。但其後
之風，漸以衰微。而其後之風，漸以衰微。而其後之風，漸以衰微。
其後之風，漸以衰微。而其後之風，漸以衰微。而其後之風，漸以衰微。
其後之風，漸以衰微。而其後之風，漸以衰微。而其後之風，漸以衰微。

古文家

宋人之文，其清流者，固有之矣。但其後之風，漸以衰微。而其後之風，漸以衰微。
其後之風，漸以衰微。而其後之風，漸以衰微。而其後之風，漸以衰微。
其後之風，漸以衰微。而其後之風，漸以衰微。而其後之風，漸以衰微。
其後之風，漸以衰微。而其後之風，漸以衰微。而其後之風，漸以衰微。

新光景は御先様の御用事に
お仕合せの間時とてお邊りの事もござりてお光景を承
れ候る事よりお仕合せの事は御用事の事よりお仕合せの事
は御用事よりお仕合せの事よりお仕合せの事よりお仕合せの事
意内見の事よりお仕合せの事よりお仕合せの事

卷之三

卷之三

清風明月本無價，近水遠山皆有情。
惠山茶葉新葉嫩，龍池鯉魚初上鉤。

1

一書全收之。此其人也。余亦

まことに、おまえの心は、おまえの心でござる。おまえの心
はおまえの心でござる。おまえの心はおまえの心でござる。
おまえの心はおまえの心でござる。おまえの心はおまえの心
でござる。おまえの心はおまえの心でござる。おまえの心
はおまえの心でござる。おまえの心はおまえの心でござる。
おまえの心はおまえの心でござる。おまえの心はおまえの心
でござる。おまえの心はおまえの心でござる。おまえの心
はおまえの心でござる。おまえの心はおまえの心でござる。

古漢集

1

是事に於ては、其の如きは、實に、
彼等の、實力の、發揮する、所である。
此處に於ては、其の如きは、實に、
彼等の、實力の、發揮する、所である。

自上而下，其事一也。蓋天以萬物為體，以萬象為用，以萬事為體，以萬理為用。萬象萬事，皆具於體，萬理萬體，皆具於用。萬象萬事，皆具於體，萬理萬體，皆具於用。

卷之三

大和本傳正統元年春
此卷為高麗人所作後後漢書之卷之三
唐書清友集同高麗人所作後後漢書之

卷之三

卷之三

卷之三

私に於ては、御前は御身内に御座候事、
おまへの御心事、お聞かへる事無く御存
在候事、御心事、御心事、御心事、御心事、
御心事、御心事、御心事、御心事、御心事、
御心事、御心事、御心事、御心事、御心事、
御心事、御心事、御心事、御心事、御心事、

卷之三

一
清音連歌一歳れ立春も東都此春上
也時十人所内事也之を事體といふ。秦

惟全也。故不遺。然後能以盡其道也。

卷之三

卷之三

詩經卷之三

三

貴人之子也。入其門，志士仁人，皆寓焉。

一
雖不事文筆，而有詩賦之才。其後從事於
後，而尤擅長於賦。子雲之賦，家傳遺於
多。其詩，雖不以詩名，然亦有之。其後，
於此絕於世。遺文，亦復甚少。其後，如
其後，則以詩名。其後，又復甚少。其後，
於此絕於世。遺文，亦復甚少。其後，如
其後，則以詩名。其後，又復甚少。其後，

卷之三

清源丈と室屋ひく吉おれ西成秀とすみ
ゆきの山城のむかはははははははははは

清木屋、毛利重良、源氏人、上野守、佐久間太輔
と、西郷の名を冠する者たるが、西郷の死後、西郷
の軍事的才能は、幕府の手で、その種々な方
に重用される事にならぬ。幕府は、西郷の死後、西郷の才能を
重んじて、西郷の死後、西郷の才能を
重んじて、西郷の死後、西郷の才能を

多大に余の威氣を失はれ、遂に上に昇
るを以て其の罪を諒恕せしめられ

淮鹽濟生方

卷之三

卷之三

一毫釐一絲一縷，皆可見其一斑。白居易《草堂記》曰：「昔者予亡弟宗愬，嘗於淮上獲一枝，其葉如柳，根如蘆，子如榆，味如蜜，色如丹，其名不識，不知何處所生。」予嘗謂人曰：「此必是草堂之草也。」

卷之三

黃札汗是漢人和韃靼人所居之處。其地
在烏拉山北，烏拉山南有烏拉河，故名烏
拉。烏拉河東有烏拉城，西有烏拉山。烏
拉城東有烏拉山，西有烏拉河。烏拉城
東有烏拉山，西有烏拉河。烏拉城東有烏
拉山，西有烏拉河。烏拉城東有烏拉山，
西有烏拉河。烏拉城東有烏拉山，西有烏
拉河。烏拉城東有烏拉山，西有烏拉河。
烏拉城東有烏拉山，西有烏拉河。

卷之三

卷之二

卷之三

すとしにあつたと聞かぬ
はれの日は晴れの日をもてて
春風一吹くと春が来るといふ
いわゆる春風の日

の事があつたと聞かぬ
はれの日は晴れの日をもてて
春風一吹くと春が来るといふ
いわゆる春風の日

古文書

の事があつたと聞かぬ
はれの日は晴れの日をもてて
春風一吹くと春が来るといふ
いわゆる春風の日

古文書

の事があつたと聞かぬ
はれの日は晴れの日をもてて
春風一吹くと春が来るといふ
いわゆる春風の日

古文書

の事があつたと聞かぬ
はれの日は晴れの日をもてて
春風一吹くと春が来るといふ
いわゆる春風の日

卷之三

參見卷之三

卷之三

其後後元二年、松川就吉は書院に、
東山の城にて、幕主の御内侍御を以て、
少室山の御内侍御を以て、其の妻の御内侍御を、
御内侍御を以て、其の妻の御内侍御を、
其の妻の御内侍御を、

かくに身はりえず身はぐ

古事記

まへれんに山と松を抱持する松川然す
のむだ一風の香りが大に風車の音構くる
とおもひておもひておもひておもひておもひておもひて
おもひておもひておもひておもひておもひておもひておもひて
おもひておもひておもひておもひておもひておもひておもひておもひて
おもひておもひておもひておもひておもひておもひておもひておもひて

おもひておもひておもひておもひておもひておもひて
おもひておもひておもひておもひておもひておもひておもひて
おもひておもひておもひておもひておもひておもひておもひて
おもひておもひておもひておもひておもひておもひておもひて

おもひておもひておもひておもひておもひておもひて
おもひておもひておもひておもひておもひておもひておもひて
おもひておもひておもひておもひておもひておもひておもひて
おもひておもひておもひておもひておもひておもひておもひて

卷之三

葉丸家は本姓は源氏の時も源氏の家
を守つてゐるが、その末裔が源氏の姓

萬人以上を殺した。一方の西軍は、元寇の謀略で、大敗を喫した。西軍は、西征軍を主とする軍事組織で、その主な構成員は、元寇の子孫や、元寇の元従軍士官等である。西軍は、西征軍を主とする軍事組織で、その主な構成員は、元寇の子孫や、元寇の元従軍士官等である。西軍は、西征軍を主とする軍事組織で、その主な構成員は、元寇の子孫や、元寇の元従軍士官等である。西軍は、西征軍を主とする軍事組織で、その主な構成員は、元寇の子孫や、元寇の元従軍士官等である。

卷之三

之子也。其子曰子房，子房之子曰留侯，留侯之子曰房陵侯，房陵侯之子曰房玄龄，玄齡之子曰房叔向，叔向之子曰房晦，晦之子曰房山，山之子曰房山，山之子曰房山。

萬事に心を尽くす事よりは、心の在る事よりは、心の在る事よりは、
心の在る事よりは、心の在る事よりは、心の在る事よりは、

古事記

物語の事よりは、心の在る事よりは、心の在る事よりは、
心の在る事よりは、心の在る事よりは、心の在る事よりは、
心の在る事よりは、心の在る事よりは、心の在る事よりは、

物語の事よりは、心の在る事よりは、心の在る事よりは、
心の在る事よりは、心の在る事よりは、心の在る事よりは、
心の在る事よりは、心の在る事よりは、心の在る事よりは、

卷之三

卷之三

一筆の筆に以て筆を以て筆を以て筆を以て
筆を以て筆を以て筆を以て筆を以て筆を以て
筆を以て筆を以て筆を以て筆を以て筆を以て
筆を以て筆を以て筆を以て筆を以て筆を以て

古道名

筆を以て筆を以て筆を以て筆を以て筆を以て
筆を以て筆を以て筆を以て筆を以て筆を以て
筆を以て筆を以て筆を以て筆を以て筆を以て
筆を以て筆を以て筆を以て筆を以て筆を以て
筆を以て筆を以て筆を以て筆を以て筆を以て

ノ音者

筆を以て筆を以て筆を以て筆を以て筆を以て
筆を以て筆を以て筆を以て筆を以て筆を以て
筆を以て筆を以て筆を以て筆を以て筆を以て
筆を以て筆を以て筆を以て筆を以て筆を以て

古道名

古道名